

は、代替地を粘り強く追求し、市長が出席する会議があると太原まで追いかけて、扉の外で待った。市長は、市街地に近く便利なところに代替地を無償で30年貸与してくれた。まさに異例のこと。

さらに2011年春、第2の拠点の白登苗圃と実験果樹園が、新しい工業団地に収用された。地下資源頼みの山西省の経済構造を変え、多角化をはかる中央政府の後押しがあり、抵抗は無理。万事休すところだが、幸い先ほどの代替地があった。

整地と作業道建設、井戸掘りと配水管建設、管理棟建設、苗木の移転などを大急ぎで進め、1年たらずで23haの新拠点を完成させた。生態植林見本園、有用植物見本園（薬草を含む）まで実現したのである。JICA草の根技術協力事業の受託が大きく役

立った。

▼人のころにも、なにかが植わった▼

2011年4月、日本のボランティアツアーが大同を訪れたとき、東日本大震災・大津波への義援金が託された。協力関係にある農村からも寄せられている。小学生が先生に託したものもあり、正確な数はわからないが500人は下らない。

晩年長く大同に滞在した林野庁OBの相馬昭男さんが「このプロジェクトのすごいところは、大地に木を植えるだけでなく、人のころにも木を植えていることです」と、訪れた人たちに紹介していた。20年たって、その言葉の重みを受け止められるようになった。

図書紹介

早生樹 産業植林とその利用

岩崎 誠・坂 志朗・藤間 剛・林 隆久・松村 順司・村田 功二，発行：海青社，2012年発行。

定価：3400円税別 ISBN：978-4-86099-267-5

本書はアカシア・ユーカリをはじめとする早生樹の育種から造林、利用に至るまでの、いわば早生樹林業の「ゆりかごから墓場まで」を取り扱った一冊である。書籍の前半では、産業植林の現況や早生樹に関する科学的知見を解説した教科書的な内容が記述されている。そして書籍後半においては、成分抽出時の問題や木材燃焼システム毎の利点・欠点など、利用に関連した技術的内容を重視した記述がなされている。

そのため初学者にとっては、早生樹の育成と利用にまつわる諸事について概観できる一冊となっている。また、早生樹林業に関わる研究者・技術者にとっては、自らの専門分野と同時に関連分野の技術動向を把握できる良書と言える。逆に広範な話題を取り扱っているが故に、多くの読者にとって各々の専門分野とは異なる話題に大きく頁が割かれている

ことになると思われるが、その分野の専門家以外にはなじみの薄い用語や略語については、巻末の索引・用語解説において100文字前後の解説が加えられており、内容を理解する上で大きな助けとなっている。

ただ一つ難を言えば、本書では各章において独立した話題が提供されており、章をまたいだ視点が不足していることが点睛を欠く部分である。例えば、バイオマスの燃焼利用がカーボンニュートラルと見なされることは本書6章冒頭にも記述されている通りであるが、バイオマスの生産から利用までのサイクル全体を通してどの程度の温室効果ガスが発生し、化石燃料を利用した場合と比べてどの程度の温室効果ガス排出削減に繋がるのか、という点が最終的にはより重要であろう。章ごとには良く纏められているだけに、育種、造林から利用までを繋ぐ縦糸や、「パルプ利用」、「エネルギー利用」、「用材利用」の各章を繋ぐ横糸が貧弱であることは残念である。

とはいえ、本書で早生樹の植林から利用までを網羅した意義は大きい。早生樹に興味をお持ちの諸氏におかれては、是非一読をおすすめしたい。

(相川真一)